

三野和恵『文脈化するキリスト教の軌跡 イギリス人宣教師と日本植民地下の台湾基督長老教会』
書 評

三野和恵『文脈化するキリスト教の軌跡 イギリス 人宣教師と日本植民地下の台湾基督長老教会』

田 中 智 子

本書は、現在スコットランドで研鑽を積む三野和恵氏が、2015年に京都大学に提出した学位請求論文を加筆修正し、出版したものである。構成は以下のとおり（各章は、「はじめに」「小括」をそれぞれ伴うが、煩瑣となるので省略した）。

序論

第一章 ムーディにおける宣教師としての自己形成と台湾人との出会い——
グラスゴーから彰化へ（一八九五——一九一四）

第一節 宣教師としての自己形成の過程

第二節 宣教初期ムーディの英文著作と宣教事業

第三節 白話字文書にみるキリスト教論——逆説的な救済の強調

第二章 台湾人信徒のキリスト教理解と教会形成——林学恭、廖得とムーディとの関わり（一八九五——一九二七）

第一節 道德主義的自助努力と「中華」の「立身出世」——李春生のキリスト教論

第二節 共感と共有、祈りの牧会——林学恭のキリスト教宣教実践

第三節 独立した信仰者の確立を目指して——廖得のキリスト教論

第三章 ムーディによる宣教事業の捉え直し——教会自治運動の中での宣教

師の役割への問い

第一節 反帝国主義から問われる第一次世界大戦後のキリスト教宣教運動

第二節 宣教後期ムーディの活動——台南神学校校長として

第三節 初代教会研究——教会史研究者として

第四節 伝道師給与問題への関与——イギリス人宣教師として

第四章 台湾人信徒による自治的宣教事業——林燕臣・林茂生らによる「神の国」への呼びかけ（一九二八—三四）

第一節 台湾人牧師・林燕臣と雑誌媒体による宣教事業

第二節 台南神学校『校友会雑誌』にみる自治的宣教の構想

第三節 「基督教文明」を問う——白話字雑誌媒体と林茂生の格闘

第四章補論 台湾人信徒による神学的追求——雑誌『福音と教会』にみる危機神学と全体主義批判（一九三三—三九）

第一節 『福音と教会』に至る文脈——青年運動と教会改革運動を受けて

第二節 『福音と教会』の自治的神学的追求——人格的尊厳と社会正義を求めて

第五章 ムーディにおける「苦しみ」の神学——「失敗」した宣教事業と社会正義をめぐる考察（一九三二—四〇）

第一節 社会不正義と宣教の「失敗」

第二節 「苦しみ」への共感——個の経験を通じた植民地支配への問い

第三節 「苦しみ」の神学的問題と裁きへの警告

結論

タイトルにある「文脈化」とは、ここ30～40年来の研究動向である「文脈化神学」を下敷きにした用語である。三野氏の研究の基本的な立場を物語るもの

であるため、序論に従い、その内容を確認することから始めよう。

三野氏がここで主として依拠するのは、森本ありの研究である。森本によれば、文脈化神学とは、アジアにおける軍事独裁政権下での「社会正義の希求」として出発し、1970年代以降の神学界で着目され、現在は「民族的なアイデンティティの自覚的な模索と表出」を軸とするものであるという。

本書は以上の具体的なあらわれを、黄彰輝（1914～1988、「文脈化神学」の提唱者でもある）の行動と表現に見出し、「文脈化神学」が台湾に生まれた理由を、戦前の日本統治下の歴史に立ち戻って説明しようとするのである。黄は、台湾基督長老教会の牧師・神学教育者でありつつ、1965年からイギリスに亡命し台湾人自決権を要求する活動を続け、政治的発言を活発に繰り返した人物である。

その際に選ばれる考察の対象は、台湾人信徒・聖職者に限らない。むしろ彼らは群像として捉えられ、一個人による神学的営みとして検討されるのは、イングランド長老教会の宣教師キャンベル・N・ムーディ（Campbell N. Moody 1865～1940）の思想である。あらためて本書の章立てを見渡すと、ムーディと台湾人信徒・聖職者を、相補的存在と捉えつつも、主語として交互に登場させるという構成力に気づく。

植民地台湾に対する直接の支配者である日本のキリスト者ではなく、大英帝国から遣わされた宣教師ムーディを取り上げるにあたり、まず、イングランド長老教会および彼の独特な位置の確認がなされる。イングランド長老教会は、スコットランドの非国教派教会（自由教会）やスコットランド人移民を母体とする組織であり、ムーディもグラスゴー郊外のスコットランド自由教会信徒の家庭に生まれた。すなわちムーディは、重層化した歴史的関係（イングランド—スコットランド、国教会—長老派）のなかで、「二重の周縁性」を帯びた存在と位置づけられる。

本書は帝国主義研究の立場をとって、序章では、帝国主義的植民地支配

という観点からサイドの議論、そして帝国主義とキリスト教という観点からコマロフ夫妻とゲイツケルのアフリカ宣教史研究が振り返られる。その上で、ムーディと台湾キリスト教史に関わる個別の先行研究が批判的に検討される。

特にムーディについては、台湾での経験をキリスト論的・宣教論的問題として受け止め、あるべきキリスト教像を改めて捉える契機としていった人物と捉えられる。すでに先行研究のなかには、ムーディが台湾の人々との出会いを通して文明的諸価値への懐疑にたどり着いたと理解するものも存在するのだが、本書では、彼自身の宗教思想志向に起因するものとしてこれを把握する視点が強調されているのである。その背景として、スコットランドの啓蒙哲学的世界観の多大なる影響も指摘される。このように序論で提示される思想分析的なムーディへの視線は、本書最大のオリジナリティを予感させる。

以上の問題関心・枠組の下に始まる各章の内容を、評者の感性の及ぶ範囲で、以下に紹介しよう。

第一章は、宣教師ムーディが台湾に派遣されてから、シンガポール伝道、イングランド長老教会からの一時辞職を経て、再び台湾宣教に復帰した約20年間の扱う。

この時期は、宣教史的にみれば、ヴェン（英国国教会）やアンダーソン（アメリカン・ボード）らが掲げてきた「三自（自治・自養・自伝）」の宣教方針が、人種主義的傾向の強まりと共に放棄され、宣教師の指導・指揮が重視されるようになった時期にあたる。そのなかでの19世紀スコットランドにおける「啓蒙的福音運動」からの影響を前提に、ムーディの植民地支配に対する懐疑的姿勢の形成過程、そして、白話字文書による彼のキリスト教論と、台湾人に対する文書宣教の様態が分析される。

ムーディは自治的合議制を信条とし体制との衝突も辞さないスコットランド自由教会の神学校、すなわちグラスゴー・カレッジに学び、貧富の格差という

社会矛盾を自明視する教会を批判するブルース、リンゼイ、ドラモンドといった「異端的」神学者の影響を受け、ヒル・ストリートにおける貧困層との実際の関わりも体験した。

赴任先でのムーディは、日本軍の住民虐殺や官憲支配、西洋人による現地人への誤解や暴力や軽蔑を体験し、自身を含む西洋人宣教師・植民地支配者を批判的に内省するとともに、すべての民族の自治を志向するようになり、多くの現地キリスト者を個別具体的に描写するに至った。一方で彼が、信仰のみを伝えようとの信条を有したことは、宣教師の啓蒙的役割への強い自覚へとつながった。そして台湾人には理解しがたいと観察した「罪の認識」や「信仰義認」などの教えを、彼は白話字にて論じた。

第二章では、第一章と同時期から10年余り後までを対象に、台湾人信徒である李春生（1838年生）、林学恭（1857年生）、廖得（1889年生）のキリスト教理解が扱われる。

例外的に社会的影響力の強かった「台湾史上最初の思想家」李の信仰は、道徳主義的自助努力思想と呼ぶうるものであったが、それは改宗者による「国勢富強」「立身出世」の物語でもあった。日本の領台による「災い」は、キリスト教への改宗拒否が招来したものであって、彼の思想は、そこからの脱出のヴィジョンなのであった。

一方で、南部台湾長老教会の聖職者であった林の思想と実践は、帝国主義的状況下の「災い」に直面する人々（キリスト者でない者を含めて）の苦しみに共感し、キリスト教を軸とする共同意識の形成を重視するものであり、そこに解放の物語を提示するものでもあった。また、来台したムーディと活動をともにした彼は、ムーディが説いた「罪の認識」や「信仰義認」を核とするキリスト教理解を形成し、その宣教姿勢を評価していた。ムーディから受洗し、師弟関係にあった南部台湾長老教会の廖得は、信徒個人の学びに価値をおき、台湾人による独立した教会の実現を現実的な目標として掲げ、ムーディの教えの中

にもそれらを読み取って評価した。信徒個人の罪の認識が宗教的経験としての「新生」を導くとされ、イエス自身も同様に受けたものとしての「災い」が、救済への回路であると位置づけられた。その点において、李の認識とは対立的であった。

第三章では、台湾宣教復帰からミッション退職までの約15年間の「宣教後期」を対象に、第一章に続くムーディの思想検討が行われる。

第一次世界大戦が勃発した1914年前後はキリスト教海外宣教活動の転換点であり、キリスト教国家同士の戦争、各地のナショナリズムや反帝国主義運動によって、全世界キリスト教化の楽観的観測は揺るがされ、エルサレム世界宣教師会議によって軌道修正の動きがみられた。台湾では、議会設置請願運動が盛り上がり、植民地という共通の歴史的経験から「台湾人」という集団の共同意識が浮かび上がっていく。

そのような1920年代において、ムーディは台南神学校長を務めた。台湾社会の現実に合致しない日本語優位の教育実態の無力さに疲弊してこれを問題視し、台湾語による教育や台湾人スタッフが中心になることの必要を訴えた。一方で、同時代の台湾教会に接し初代教会の研究を進めるなかで、歴史的地理的文脈を超えた神の主権性（啓示は神の側から与えられるものとする）を再確認する神学的営みに達した。そして、台湾人伝道師の給与額改善要求に象徴される台湾教会の自治的運営を目にし、誠意と支援を示すよう本国教会に呼びかけ、自らは給与を辞退した。このようにして、彼は啓蒙主義的な宣教師主導論の克服に至った。それとともに、イエスの役割と目的に注目し、生身の人間には実現不可能な基準ではあるが、イエスと「ともにある」ことが唯一の道であると再確認したのであった。

第四章では、台湾人教会自治運動の担い手でムーディとの縁も深かった林燕臣（1859～1944）と、その息子で、台南長老教中学教頭となり抗日運動にも関わった林茂生（1887～1947）が取り上げられ、他の台南神学校卒業生らの言説

も含めながら、雑誌媒体を主な場とした彼らのキリスト教言論活動が検討される。

彼らは総体として、差別的状況に対するオルターナティブとしての「神の国」(社会正義)を模索していた。背景には、1920年代後半から30年代にかけての反植民地運動のなかで、台南長老教中学を「台湾人の学校」化する運動とそれに対する攻撃が生じる状況があった。

林燕臣は教会内外への共感的関係性の実現という理念をもち、これを実践した。また彼が充実を期した台南神学校の『校友会雑誌』は、自身が「台湾人」固有の使命を有する「キリスト教徒」であるという、相互補完的なアイデンティティの提示と確認が行われる場となった。その際、投稿者には、自他の人格的尊厳と自治への志向、そのために受けることが予想される「迫害」や「苦しみ」への覚悟がみられた。林茂生はさらに「基督教文明史観」を提示し、イエスによる贖罪および個人的な信仰義認を信仰の中核におくとともに、「個の自発性」と「天良」がそこなわれる現実の社会を、非「近代」的と位置づける理解へと踏み込んでいった。

第四章補論では、1930年代の台湾における神学議論が扱われる。前提として、この時期は、学生YMCAに象徴されるように、教会青年層とその活動が重要となる一方、軍国主義化が進んで教会自治運動が困難をきたした時代と捉えられる。具体的には第四章同様、『福音と教会』などの雑誌媒体における言論活動を通し、1920年代半ばの西洋に起こった危機神学の動向を、台湾のキリスト者が自治的主体的に受け止めたさまが描かれる。

バルトやブルンナーに代表される危機神学は、彼らの植民地主義や全体主義に対する批判的姿勢に根拠とことばを与えるものであった。彼らは集団的共同性への服従や国家による信教自由の侵害に対する抵抗の契機を、キリスト教に即した営みのなかに見出していた。そして、個の人格的尊厳の実現によって可能となる社会正義、さらには、社会不正義とは相容れないキリスト教、という

イメージがまとまるに至った。

最終章の第五章は、ムーディに再び視線を移し、前章と並行する時代における、彼の神学の行方が検討される。

日中戦争開戦、台湾における軍国主義化や神社参拝の圧力、ヨーロッパでのユダヤ人弾圧などの現実を知ったムーディは、物語を執筆し、その主人公を通して、台湾人による反植民地主義ナショナリズムに対する共感的姿勢を示した。また、他者の「苦しみ」にいかにか直面すべきかとの問いに促され、キリスト者は常に神によって問われる存在であり行動すべき個であるということ、以前に増して強く感じるようになった。

結論においては、各章の内容をまとめた上で、考察を通じて導き出された人物や主題、キーワードをクロスさせることで、本書に対する鳥瞰的な理解を読者に促している。テーマ化された問題群を、本文の示すままに挙げよう——「絡み合うキリスト教と植民地支配への問い」「宣教師ムーディと台湾基督長老教会信徒の相互関係」「台湾人信徒の雑誌媒体——自治的宣教、および神学の模索の場として」「人格的「出会い」の社会的意味」「青年黄彰輝の格闘——「苦しみ」のコンテクスト」の中で。

特に最後の問題は、「文脈化神学」が台湾に所以したことを問うという序論の問題設定に呼応したまとめとなっている。

若い世代にあたる黄彰輝（1914～1988）であるが、すでに戦前（少年・青年期）に、父の置かれた苦境や林茂生との出会いを通し、植民地支配下にある「苦しみ」に立ち向かうことの必要を認識し、それが戦後に本格化する彼の神学の原点となった。そして「苦しみ」が、日本による植民地支配からの解放後にも持ち越されて深化し、「文脈化神学」を生み出していく軌跡が、政治状況とともに見通される。

さて、本研究は、台湾現地の文献（白話字・漢文）、日本語文献、英語文献

を駆使できる言語能力を身につけなければ不可能な成果であって、こつこつと積み重ねられたのであろう努力に対しては敬服するしかない。また、背景となる神学思想史・宣教史をおさえた上で、研究対象自身が発したことばに寄り添いながら、その立場を考察していこうとする手法に貫かれている。全380頁余の本文に、140頁に及ぼうかという膨大な註、資料（含：史料リスト・年表・写真・地図）、文献目録、地名・事項・人名索引が付されたこの大著が、きわめて精力的かつ丁寧な取り組みによる作品であること、研究史の強い影響を受けつつも三野氏固有の内発的関心の産物であることは、すぐに察せられる。

同志社大学人文科学研究所において蓄積されてきたアメリカン・ボード研究あるいは教育史・社会事業史研究が、本書の視角や方法から多くを学べることは、ここまで紹介してきた内容をみれば、贅言を要さないであろう。特に、アンダーソン主義の下、教育・医療といった活動を強く志向した19世紀のアメリカン・ボード伝道が、その後いかなる転換を果たしたかという問題、来日宣教師あるいは同志社から生まれ出た多くの日本人教育家や社会事業家のキリスト教理解など、今後取り組むべき問題群を突きつけられる思いがする。思想書あるいは雑誌記事、宣教中の意識や行動を記録した書簡など、史料の集めかたや扱いかたも具体的に参考となる。

そのような本書に対する注文は、煎じつめれば以下の一点に尽きる。

「人格的尊厳」や「人格的交わり（関係、出会い）」「人格的生命」などの用語が本書に散見するが、そもそも神に対峙するものとしての人間の「人格」そのものについて、三野氏の根底にある理解や歴史解釈はどのようなものであろうか。本書の論の運びは全体として非常に着実であるが、この点について正面から主題化し詳述した箇所は、評者は行きつくことができない。これらの用語にまつわる考察は多く展開されているが、焦点は「尊厳（の重視）」「交わり」「出会い」の方であり、そもそもの「人格（的）」の捉えられかたは、類推するほかない。

本書における「人格」の輪郭は、断片的には窺える。例えば、黄彰輝の著作にそくした次のような説明（序論）である。黄の見解とは、「(1)神は「御自身のかたちにかたどって」——「人格を有する存在 persons」として——人間を作った。だからこそキリスト教は、(2)台湾人を含むすべての人々が「自らの未来をえらぶ権利と自由を神に授けられた」者として「尊重」されるべきことを主張し、(3)これらの人々を「売りに出される品物」や「取り戻されるべき失われた土地のかげら」のように扱う「深刻なる不正義」には抵抗せねばならないのだ」というものとされる（17頁）。

(2)で言われていることはつかめるが、(1)と(2)の間には飛躍があって、(1)で言われるところの「人格」の意味が明らかでないことには、なぜ(2)が導き出されるのか（「だからこそ」の意味）、得心がいかない。(1)で言われる「人格」とは、(2)から(3)への流れに合わせて推察すると、西洋近代社会の産物としての「人権」（「基本的人権」、あるいは神との関係を考慮するならば、「天賦人権」論的なもの）と言い換えてかまわないもののように聞こえる。しかし、「人格」と「人権」とは、無媒介にイコールでつなげられるものではない。であるから、初発点にある「人格」について、さらなる説明がほしいのである。その上で、(2)から(1)への演繹ではない、(1)からの(2)の導き出されようが知りたいのである。

相互の存在を不可欠とするとはいえ、史料の相対的な豊かさもあって、本書の真骨頂は、台湾人というよりムーディの長期的で経験重層的な議論に対する分析にあると感じたが、そのムーディの議論に登場する「人間の精神」（196頁）が、「人格」といかなる関係にあるのかわからないのかという点も気になる。バルトの「理性」（326頁）も、関連してくる概念といえようか。——以上、少なくとも評者にとっては、「人格」とは何かを理解できなければ、三野氏が価値をおく「文脈化神学」の意義の理解も、また、「正義」なる用語の必然性の理解も、おぼつかないのである。

三野和恵『文脈化するキリスト教の軌跡 イギリス人宣教師と日本植民地下の台湾基督長老教会』

本書は、歴史研究であるとともに神学史研究、いや神学研究（「ある宗教信条を持つ者が、自らの心情の内容、根拠、意味を問い、再確認し、発信する営み」：18頁）であることをめざす書であろう。三野氏ひいては「文脈化神学」の意図とずれる向きもあろうことは承知した上で、評者は、歴史を神学の前にさらして検討する可能性を開いている点が、本書最大の魅力であると捉えている。であるからなおさら、神の前で許された「人格」なるものについて、自身と、歴史的限定性を帯びた研究対象の往還のうちに、議論が展開されることを望んでやまない。

（新教出版社、2017年）

（第19期第3研究会による成果）